

世界の中の日本の幼児教育

——榎原洋一氏による講演記録から——

文・伊集院理子

(大学教員)

平成二十八年十二月、お茶の水女子大学附属幼稚園創立二四〇周年記念シンポジウムが催され、同大学理事・副学長(当時)であり、日本子ども学会会長でもある榎原洋一氏に、「世界の中の日本の幼児教育」として基調講演をいただきました。その一部を、ここに報告します。

*

お茶の水女子大学副学長、小児科医として、またベネッセのチャイルド・リサーチ・ネット(CRN)で幼児教育のさまざまな活動にかかわっているということで、私が今回のこの基調講演という大役を担うことになった。

「世界の中」でと言ったときに、どのように考えればいいのか、私なりにまとめてみた。

一つは、日本の幼児教育が世界の中でどういう位置にあるのかということである。グロ―バリゼーションの時代にあつて、決して日本の幼児教育だけが他の外国と離れたところにあるわけではなく、お互いに影響しあつている。二つ目に、日本は世界の幼児教育から何を学んでいるのかということ。そして三つ目、私が一番強調したいことだが、わが国が百四十年前からやってきた幼児教育についての蓄積をどのように世界に発信していくのか。この三つの視点があると考ええる。

伊集院理子(いじゅういん みちこ)
お茶の水女子大学附属幼稚園前副園長。元本誌編集委員。
現在は十文字学園女子大学幼児教育学科教授。

遊びとレジリエンス

OMEP (Organisation Mondiale Pour l'Education Précolaire : 世界幼児教育・保育機構) は、世界中の子どもたちが育つためのより良い保育の条件をつくろうと活動している団体である。この団体が、幼児教育の中で最近重要なテーマとして考えているのが、「遊びとレジリエンス」というテーマだ。「レジリエンス」は心理学的な言葉で、抵抗力という意味だ。もう一つが「持続可能な発達に向けた保育」というテーマで、今この二つが非常に重要だといわれている。

わが国では、保育の中で、遊びを重要なものとして位置づけてきた。遊びの重要性については日本では周知のことだが、世界ではどうなのかというと、日本ほどではなかったが、二〇一三年に“*Mind, Brain, and Education*”という雑誌に、アメリカの発達心理学者ハー

シューパセック (Kathy Hirsh-Pasek) が、ガイドされた遊び (guided play) が子どもの発達においてきわめて重要であるということを発表して注目を集めている。その中で、遊びと直接指導とは両極端にあるものであり、指導ではなく自由に遊ぶことの重要性が訴えられている。

自由遊びとガイドされた遊び

ハーシューパセックは、自由遊びとガイドされた遊びの違いを説明することは難しく、まさに発達心理学の大きな課題であると言っている。「ガイドされた遊びというのは子ども主体であり、かつそこに、ある程度大人による見守り、ガイドが入っているものである」と定義している。日本では当たり前のこととなっている遊びのことが、発達心理学ではきわめて新しいトピックスとして扱われているのである。さらにこの論文の最後には、今日

的な課題として、このようなガイドされた遊びで子どもはどれだけ良くなるか、その効果を見ていこうと書かれている。はたして効果を測ることができるのかという議論があるが、測ることで、ガイドされた遊びの意味を確立しようという意見である。

ここまでの話を聞いて、日本では九十年前から倉橋惣三が「誘導保育」という考えを生み出し、そのような保育を進めてきていてはないか、日本ではずっと前からやっております、今さら言われることをもどかしいと感じる方もいるだろう。しかし今、発達心理学では新しい課題として、遊びを捉え直しかつそれを証明していこうという流れが起こっている。今後、日本がやってきた幼児教育を世界に発信することが課題になるだろう。また世界の教育者や、日本でわが子に保育を受けさせている保護者たちにも、その意義を納得してもらうことが大切になる。

ESDに向けた保育とは

ESD (Education for Sustainable Development: 持続可能な開発のための教育) に向けて、エコロジカルな社会をつくろうということ、OMEPPでは「7つのR」、リユーズ(再利用)、リデュース(減らす)、リサイクル、リストリビュート(栽培)など、つまり物を消費する世界からそうでない世界に移行させようという社会改革の考え方を幼児教育に取り入れようとしている。日本の幼児教育ではすでにやっているではないかという意見もあるかと思うが、それらが今大きな課題として取り上げられている状況にあるということを知っておく必要がある。それぞれの園、国、地域でこのESDが本当にできているかを測る評価尺度をつくろうと提案しているところである。

ESD評価尺度は、1から7の段階があり、

3が「まあまあ」で、5は「グッド」、7になると「非常に良い」となる。例えば、職員や園児がしばしば食事時やトイレから出た後に手を洗うことができない、洗わない、洗う水がない、これは1となる。3は、園児は動物や植物の世話をするなどの活動に少なくとも一つは参加しているレベル。日本ではすでに1や3はない。評価して何かしようというのではなく、これをもとに、世界中のさまざまなレベルの幼児教育の目標を一緒にしようという考え方である。

より良い保育実践のために

より良い保育実践をどのように見いだすのか、保育の質をどのように考えたらよいのか、私なりに考えてみた。例えば、モンテッソーリ、フレーベルなど、理論からトップダウンで、あるべき姿を探していくというアプローチがある。もう一方で、実践から学ぶという

方法もある。例えば、町ぐるみで幼児教育を支えているイタリアのレッジョ・エミリア市の幼稚園の実践などは、光を非常にうまく取り入れて子どもたちの美術的な感覚を刺激している。上海の幼稚園も同じようにやっているが、幼児教育の質を求める世界の幼児教育者はなぜレッジョ・エミリアに行くのかというと、そこには哲学があるからだ。レッジョ・エミリアから何をどう学ぶのかについて——ここからは小児科医という理科学的な見方になるが——、保育実践を比較するために、基本的制度、子ども観、国・自治体の指針、理念、保育の形、一日の流れ、保育士の労働、とカテゴリーに分けて評価していく方法を考えている。CRNマトリックスというが、このマトリックスでレッジョ・エミリアと日本を比較することで、日本は何を取り入れるべきかがよりわかりやすくなった^注。美術的な直感でレッジョ・エミリアがいいというのではなく、

分析的に見ていくことも必要ではないか。

しかし、最近は何事も分析的に見るより、ホリスティック（全体的）に見る傾向が強くなっていくといわれている。世界の中でホリスティックな見方の重要性も証明していかなくてはいけない時代になっている。

ジェームズ・J・ヘックマン (James J. Heckman) というノーベル賞を受賞した経済学者は、就学前教育の投資対効果は、他の発達段階における投資よりも高いことを検証し、幼児教育にもっと社会的な資本を投入すべきだと指摘している。そういう努力を日本も今後していく必要があるが、それに加え、日本には百四十年間の幼児教育の歴史があるのだから、それらを世界にわかりやすく説明する必要があると考える。

文化人類学の視点からジョゼフ・トービン (Joseph Tobin) が、日本と中国とアメリカの幼児教育を比較している。その中で例えば、

京都の幼稚園を観察した際の事例が紹介されていて、けんかの場面にすぐ介入しない保育者の在り方について「*rainnori*」(見守り)というキーワードを日本語のまま使って説明している。日本文化の特徴というと、最近は「おもてなし」という言葉も出ているが、こういうキーワードはマトリックス分析では出てこないものかもしれない。しかし、今はそのようなキーワードも出していく必要があるのだと考える。優れた保育実践を世界に発信していくことも日本の責任ではないかと思っている。ご清聴ありがとうございました。

注

マトリックス分析とは、問題解決のために、問題とかわる要素を、行と列に分けて二次元表に配置し、要素の関係性に着目する手法のこと。